

第4回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日 時 平成21年2月4日(水) 午後2時 ~ 午後4時

場 所 京都ロイヤルホテル 2階 翠峰の間

出席委員(敬称略)

麻生圭子委員, 池坊由紀委員, 梶田真章委員, 柏瀬武委員, 潮江宏三委員,
杉山準委員, 鈴木千鶴子委員, 千宗室委員, 西島安則委員, 村井康彦委員,
山中英之委員, 渡部隆夫委員, 細見吉郎委員

事務局

山岸吉和文化市民局長, 平竹耕三文化芸術都市推進室長,
内山修文化芸術都市推進室担当部長, 寺井正文化芸術都市推進室担当部長ほか

1 開会

2 委員紹介

3 議事

(1) 会長の選任及び副会長の指名

村井康彦委員が会長に選任され, 副会長に千宗室委員が会長から指名された。

(2) 京都文化芸術都市創生計画の取組状況について

資料2, 3に基づいて事務局から説明

【説明項目】

- 「文化芸術都市創生計画」(以下, 創生計画)の取組状況(全体概要)
- 伝統芸能文化センター構想と京都創生座の新たな展開
- 国民文化祭
- 文化財の保護・活用の取組
- その他, 平成20年度の新規事業, 充実事業の紹介
(子ども感動応援ステージ, 源氏物語千年紀事業の取組 等)

(3) 意見交換

<村井会長>

創生計画に掲げられている施策を図式化すると, 計画冊子11ページの図のようになる。

子ども、芸術家、まち全体、地域、市民・NPO・企業等と、さまざまな対象の施策・事業が幅広く展開されている。

ただ今、事務局から創生計画に掲げられている事業の主なものについて報告があった。この報告、あるいは創生計画全般について、御意見を順番に伺いたい。

なお、芸術文化と文化芸術の違いであるが、芸術文化は、芸術が対象であり、文化芸術は、文化全体の中で芸術に重きを置くという概念である。

<委員>

人材育成や事業展開等、創生計画をさまざまなアプローチで進められていることが分かった。また、施策の着手率も高く、着実に進捗しているものと思われる。

私は北区役所の文化事業にも携わっているが、先週北文化会館で実施された催しへの参加者が多かった。この不況の時こそ、文化の持つ力、癒しの力が人々に必要とされていることを感じた。

また、文化ボランティアの方にもたくさん来ていただき、スタッフのとの役割分担やボランティア相互の協力により力を発揮できており、これまで以上に進歩が見られた。

文化はいろんな切り口で、多くの人々が参画できる、包容力のあるジャンルなので、こういう取組を進めているということも多くの方々に情報発信していただきたい。また、文化芸術は継続性が大切であり、定着を図るには繰り返し取り組む必要がある。一過性となることのないよう、必要なものを長い目で育て、継続させることが大切である。

<委員>

現在整備の検討が進められている水族館を造るぐらいなら、子ども美術館が梅小路にできればよいと思う。

国民文化祭は各都道府県持ち回りの40数年に1回開催という、一過性のものであり、創生計画の中核事業に据えるのはいかがなものか。これからの京都にどう関係があるのか。

京都コンサートホールよりも、府民ホールアルティの方が使用しやすいという声も聞くが、改善が図られているか。

京都という風土、環境に子どもたちが触れ、育ち、そこから新しい芸術が生まれていくような取組があればと思う。

<事務局>

国民文化祭については、持ち回りで開催する継続事業だけでなく、開催地の特色を生かした文化を発信する事業もある。開催する以上は一過性のもので終わらせること

なく、「暮らしの文化」の再発見、普及・継承等、創生計画の未着手の事業に取り組むきっかけとし、今後につながるものとした。平成21年度に京都市実行委員会を立ち上げ、各委員の方々の御意見を賜りつつ検討を進めて参りたい。

<村井会長>

国民文化祭については、一過性のものとする事なく、この機会に新しいものを発掘して、今後その事業を継続していくというプラス思考で取り組んでいただきたい。

<事務局>

京都コンサートホールの平成19年度の稼働率は、大ホールが約55%、アンサンブルホールムラタが約47%である。府民ホールアルティは京都コンサートホールより使用料が安価であるため、料金面では使いやすい。

京都コンサートホールの稼働率向上策として、若手の新進音楽家や学校公認の楽団・サークル活動等に対し、指定管理者である(財)京都市音楽芸術文化振興財団がホール使用料の半額を助成する取組を平成20年6月から開始し、周知を図っている。こうした制度が浸透していけば、利用率の向上につながるものと考えている。

<委員>

国民文化祭の知名度が全体的に低い。これまでの開催では、地域のお祭りという認識でしかなかったが、京都での開催を機に、国民文化祭が全国区になるような意気込みで取り組んではどうか。「ほんもの」に触れていただくことが京都では可能となり、京都の持つ「場」を生かしながら、アマチュアの発表・交流の場となしてほしい。文化には継続性が重要であると考え。平成20年度の源氏物語千年紀が、京都から発信していくシステムを構築し、「古典の日」制定への動きにつながるのと同様に、国民文化祭が何らかの取組に継続できればよい。

源氏物語千年紀は、府市協調で進めたほか、さまざまな参画があり、一つの流れをつくったことにより成功した例である。国民文化祭についても府市協調で進めていただきたい。源氏物語千年紀の取組に続き、国民文化祭を核としてさまざまな事業を集約し、そこから波及するような構図をつくれれば、創生計画に掲げる施策がばらばらにならず、吸引力が生じるのではないか。

<村井会長>

国体は、各種目の競技成績という明確な目的がある。一方、国民文化祭は、開催地の文化、芸術、芸能をメインとしつつ、全国から参加者を募る。府市協調で実施する以上、京都の文化資源を生かし、京都の文化芸術を有効に全国へPRする機会としてほしい。

<委員>

77もの施策が展開されているが、これらが希薄化してはいけない。創生計画の根底には、京都の伝統芸能文化を維持発展させることと、稀有の伝統及び先端双方の芸術創造都市である京都の活力を維持発展させる、この2つが大きな柱となっており、これらを含めた環境整備をするため、77の視点で創生計画が構成されているものと認識している。この2つの柱を見失わないように、全体の施策を取り組んでいくことが大切である。

地域文化財サポーターと地域文化財マネージャーは、歴史や考古学を専門としているが、京博連では美術館のボランティアなどにも取り組んでいる。これらの分野のボランティアへの教育はどのようにされているか。また、美術館等とのボランティアとどのように連携しているか。

また、平成20年度は京都市・パリ市姉妹都市盟約50周年であったが、今後の国際交流の予定があれば伺いたい。

<事務局>

みやこ文化財愛護委員と京都市文化財マネージャーについては、今年度初めての取組である。みやこ文化財愛護委員の育成事業については、今年度は源氏物語千年紀という大きな事業があったため、これに合わせて進めてきた。

具体的には、NPO平安京などの遺跡について説明できる団体に呼びかけ、集まっていたメンバーに埋蔵文化財等に関するレクチャーを行った。そのレクチャーを受けられた方々に、スタンプラリー参加者への解説をお願いした。

今後も工夫しながら教育の充実を図って参りたい。

<事務局>

京都が非戦災都市であることから文化財的な建造物が多く残っており、近代の建物にまで文化財保護の手が及んでいない。行政だけでは新しいものを掘り起こせないことから、当面、建造物について、価値あるものを発見し、調査していただきたいという趣旨で文化財マネージャーを育成した。また、文化ボランティアの取組もある。門川市長は「共汗サポーター制度」を政策の柱の一つとして打ち出しており、こうした枠組の中で各分野が重複しないよう合理的に運用していきたいと考えている。

海外との交流については、本市の文化施策の歴史を振り返ると、市民の文化の向上と海外との文化交流が大きなテーマとなっている。直近の予定では、来年ボストンとの姉妹都市盟約50周年の文化交流がある。

<委員>

創生計画に掲げる施策は幅広く、総花的になりがちであるが、その中でもメリハリをつけて着手していることが分かった。

事務局の報告の中で高い関心を持ったことは、動物園の整備である。従来の動物園は、珍しい動物を対象としていたが、今後はペットや環境を含めた幅広い視点を持った整備をすればよいのではないか。

また、岡崎エリアは、動物園のほか、京都会館や美術館などの文化資源が集積している。この地域を子ども連れ、家族連れで「歩いて楽しいまち」と実感できるような統一感のあるまちづくりを進めていただきたい。岡崎エリアだけでなく、市内のさまざまな地域について、何かイベントをするというのではなく、そこを訪れる人々がそれぞれの楽しみ方で、そのエリアを歩き回れるような取組となるとよい。歩くことは、特に子どもにとって大切なことである。また、市内には魅力ある場所が多いので、近隣のエリアと合わせて歩いて楽しいまちづくりができればと考えている。

さて、子どもに本物の文化芸術を体験させる取組は大切である。小さい頃から、演劇や伝統芸能だけでなく、現代アートを体験させる環境づくりをしていただきたい。

<村井会長>

岡崎エリアの施設管理者同士で集まり、活性化するにはどうすればよいかという論議を行っている。

<委員>

東京は主流、大阪が反主流だとするなら、京都はそのアップダウンに影響を受けにくい非主流のまちである。東京、大阪は経済のまち、京都は文化のまちだからだ。経済が落ち込んでいる今こそ、京都はその芸術文化で、日本の人々の心に自信と豊かさを与えてほしい。京都は、茶道、華道、伝統工芸などに触れて、心の豊かさを取り戻す力を与える場であってほしい。

観光客が京都に今、何を求めているのか。東京は京都に何を感じているのか。それらをふまえながら、文化芸術を発信してほしい。

また、現代の人々は、事業主催者の発行するパンフレットなどの与えられた情報ではなく、受け手の側からもウェブ検索をはじめ様々な情報を積極的に摂取しようとする。自治体の取組を紹介したサイトが検索上位になるよう、ホームページの充実をはじめ、受け手が反応する情報発信を積極的に行い、サイトを有効に活用することが大切である。

<村井会長>

創生計画についても、フォーラムのような取組を通じて、多くの方々に知っていた

だき、認知度を高めることが大切である。計画の推進に市民協力を求めるためには、計画を知っていただくことが大前提であるので、引き続き周知に努めてほしい。

<委員>

77もの多くの施策に取り組んでおり、非常に幅広いが、美術の分野においては、文化芸術都市の創生とは実感できない。

例えば、「芸術祭典・京」は、寺院という「場」と現代作家との結びつきにより、京都の文化を実感できるものであったが、現在は実施されていない。一方、民間では「京都アートウォーク」において世界的なアーティストと京都の神社仏閣等の協力による事業が展開されている。行政が民間に頼りすぎているのではないか。京都という「場」と作家とのリンクを強める取組を進めてほしい。

また、以前には京都市美術館において「思い出の美術館」という事業を実施し、歴史ある美術館の建物で、現代の作家たちに何ができるのかという面白い取組がされていたが、現在は実施されていない。予算の制約もあろうかと思うが、このような休廃止が続くようであれば文化芸術都市の衰退である。

施設面においては、京都市では、現代美術は京都芸術センター、近代以前は京都市美術館で発表というすみわけが成り立っている感じがする。現代美術の作家たちに京都市美術館を活用していただくと、歴史ある場所で発表できるという励みやステータスにもなるのではないか。

国民文化祭についても、アーティストを巻き込んで、京都の歴史的な「場」を活用して実施し、継続していくという取組を行ってもよいのではないか。

<委員>

まず、文化を創生するという意味を考えたい。「伝統は革新の連続なり」という言葉がある。文化とは、市民の願望・ニーズが積み重なってきた中で生まれてくるものであると考える。時代の流れや市民生活の変化によって、人々のニーズも変わってくるので、これに伴って新しい文化がどうあるべきかを考える必要がある。効率化優先の中に心豊かな文化、新しい文化は生まれにくい。100年、200年先の新しい文化の芽を育てるため、市民ニーズを捉え、どのような文化をつくり出していくかを議論することが大事である。政治・経済においては東京が主流であるが、文化面においては京都が主流と考える。文化首都・京都として全国に手本となるような京都となつてほしい。

また、これまでの京都が素晴らしい文化を形成してきた背景には、歴史上長い間京都に皇室があったことが大きな原動力になっていると考える。今後、京都における文化面の皇室の御公務が増え国家予算が費やされると、京都の文化が盛り上がり、文化と経済との結びつきが生まれるなど、更なる京都の発展につながるのではないか。

<委員>

文化事業は市の取組だけでなく、民間で行われている事業も多い。多くの文化事業の情報の中で、市民に届くものは一部である。むしろ、市民は自分の嗜好に応じて文化を選んでいる。

創生計画の取組として、文化芸術とまちづくり、文化芸術で産業を育てるというように、文化面で完結することなく、文化芸術を何かに役立たせるものがある。こうした施策の組み立ては、市民の嗜好を乗り越え、文化を足がかりに他の分野についても知っていただくことになるため有意義である。

また、文化芸術は生活に根付いているからこそ持続性が保てる。行政が文化事業を実施する場合、個別の事業実施で完結するのではなく、事業を通じて人と人との結びつきや、事業を推進する組織づくり、持続させる後押し役の役割を持つことが必要である。また、事業を持続するためには、その事業を続けたいと願う人々が多くいなければならない。こうした人々を結びつけ、仕掛けていく人を組織化することで、持続性が担保できるものとする。京都には芸術家や芸術家をコーディネートする人材が豊富である。そういう人を結びつけ、活性化することが、具体的な事業を実施することを可能にさせる。

<村井会長>

創生計画の冊子11ページの図においても、矢印の向きは地域に向かっている。地域のまちづくりには文化の力が不可欠であるとともに、文化芸術の生活化・日常化というものが、この計画の目指す姿である。

<委員>

全体的に、市民に「京都に住んでよかった」と思われ、京都を訪れる人々に「京都に来て良かった」と感じていただける京都をつくりたい。審議会に加わってよかった。

<千副会長>

私は府立植物園が好きなのだが、そこへ行くと、行くだけでリフレッシュし、気分転換できる。空きスペースの多さが居心地の良さを感じさせる。府立植物園以外にも、京都にはリフレッシュできる場所はたくさんあるので、まち全体で人々が何かに触れることができる場づくりがされるとよいと思う。

先日、横浜の関わりのある会社が70代のジャズ・テナーサクソ奏者のCDを制作した。奏者本人もアルバムを出すことができ、喜んでいて、また、制作スタジオもたいへん活気付いた。文化においては、若手だけでなく、才能がある語り部の世代も含めて、みんなで創生計画を進めていけるとよい。

<委員>

創生計画について、委員の皆様から貴重な御意見をいただいたことに感謝申し上げます。このような委員の先生方にお集まりいただき、「京都は恵まれている」と実感しており、本日頂戴した御意見は創生計画を進めるうえできっちり受け止めたい。

本市では幅広く様々な事業を実施しているが、市民に情報が届いていない。市では他の分野でもそのような傾向にある。経済界では選択と集中という考え方で進められるが、行政の場合は市民の幅広いニーズに応えようとするため、多岐にわたらざるを得ない。今後は、予算編成時に選択と集中を心がけて参りたい。

国民文化祭については、府市協調のモデルケースをつくりあげ、そして創生計画の実現のきっかけとしたい。

昨年10月、京都市・パリ市姉妹都市盟約50周年事業でパリを訪れた。そこでの議論において、今やグローバル化は国単位ではなく、都市単位となっていることを痛感した。海外では、京都市は「和の文化」に恵まれていると認識されているが、今後は、「和の文化」だけでなく、コンテンポラリーアートにも力を注ぎ、新しい芸術をつくっていきたい。

今後とも、委員の皆様には引き続き御指導を賜りたい。

4 閉会